

(日置郡松元町福山前原)

位置と環境

遺跡は JR 松元駅より北東に約 2 km 離れた標高約 180m の舌状を呈するシラス台地上の先端近くに立地する。

調査の経緯

南九州西回り自動車道建設に伴って、平成 3 年～8 年にかけて県教育委員会が発掘調査を実施した。調査面積は 19,500m² である。

遺構と遺物

旧石器時代、縄文時代早期・晩期、古墳時代、平安時代の遺構や遺物が発見された。

旧石器時代では、ナイフ形石器文化期終末の小型ナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器などが出土している。また、細石刃文化期から縄文時代草創期にかけての細石刃・石鏃・磨製石斧とともに細かい突き刺し文のある土器などが出土した。

遺跡で大きな特徴は、縄文時代早期の集落跡が発見されたことであった。

早期前半の遺跡は間に狭い谷を挟んで 3 か所に分かれるが、東端の A 地区では竪穴住居跡 12 軒、連穴土坑を含む土坑 130 基、集石遺構 14 基が検出された。住居跡は、一列に並ぶ 2 群がハの字状に向かい合って検出された。

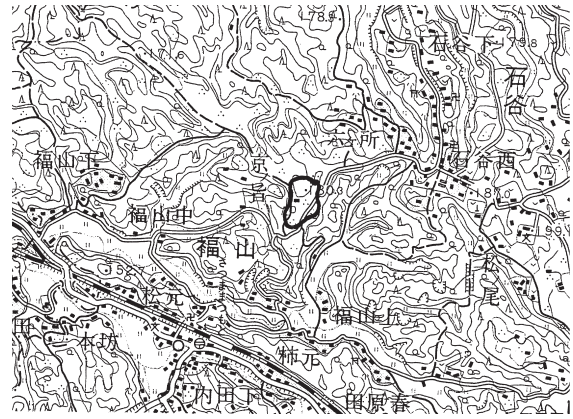
中央の B 地区では竪穴住居跡 12 軒、連穴土坑 34 基を含む土坑 80 基、集石遺構 4 基、祭祀遺構 1 基、道跡 2 条などを検出した。竪穴住居跡は 9 軒・2 軒・1 軒の 3 群に分かれ、2 軒の群は調査区外に広がっている。9 軒の群は空き地を取り囲むように並んでいる。

住居跡内の土器は床面から浮いて出土しているものが多いが、祭祀遺構とした遺構内の遺物は床面密着状態であり、規模も小さい。道跡は、相反する二つの谷に向いており、台地上でも住居跡群に向かっていて、その意味が注目されている。

西端の C 地区では竪穴住居跡 3 軒、土坑 30 基、落とし穴 1 基が検出された。土坑の中には小ピットを有するものが多いが性格は不明である。

遺物も早期前半を中心に大量に出土した。

土器は前平式土器・吉田式土器・石坂式土器が出土し、円筒形だけでなく角筒形をした土器も多量に



第 1 図 前原遺跡の位置

出土した。

石器は、砥石とともに縄文時代後期から出土する石剣状石器が早期前半の地層から出土したことが注目される。各地域により出土頻度は異なるが、石鏃 209 点、磨石 199 点、石皿 181 点、石斧 54 点、敲石 21 点、凹石 15 点、スクレイパー 16 点、磨製石鏃 11 点、石匙 4 点が出土し、特に石皿の多さが目立つ。集落跡と石皿の関係は興味深いところである。

特徴

同じ台地上に谷を挟んで複数の集落がある。この分析解明は時期による集落立地の変遷、それぞれの集落構成、生活用具の移り変わり、精神生活などを知るうえで貴重な遺跡である。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管され、一部は、上野原縄文の森展示館に展示されている。

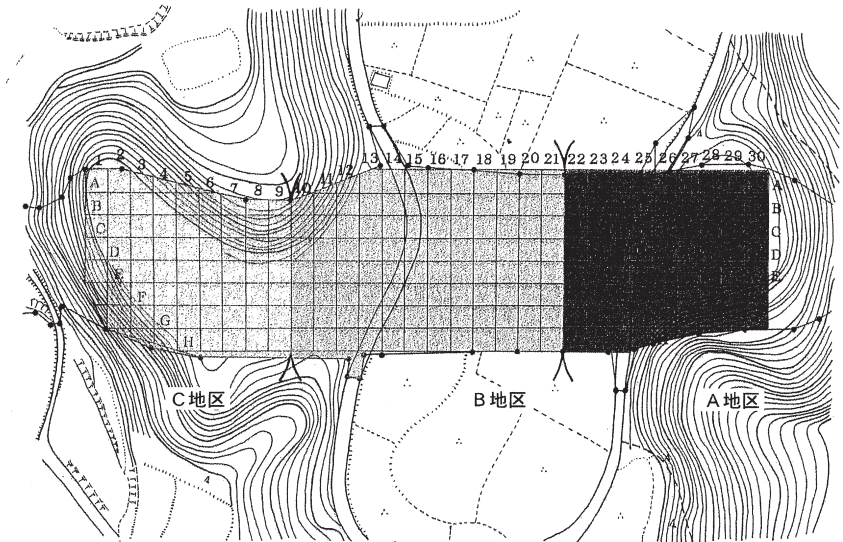
参考文献

国分上野原シンポジウム実行委員会 1997『鹿児島の縄文文化』

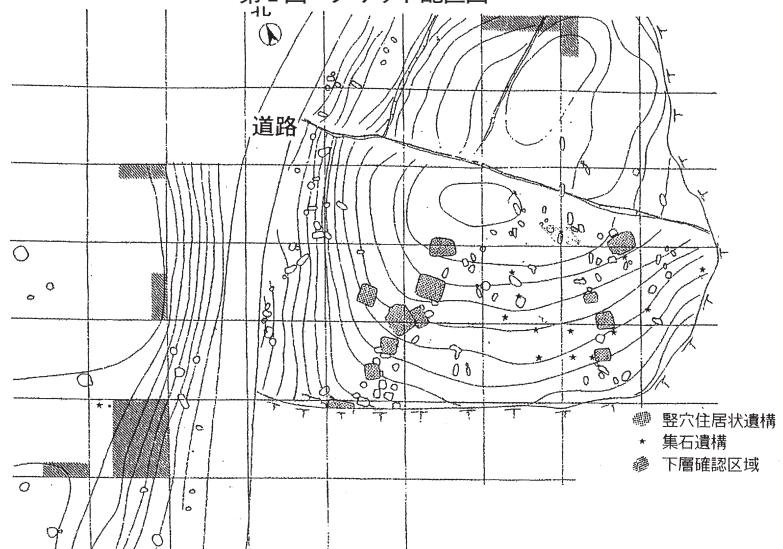
(牛ノ濱 修)



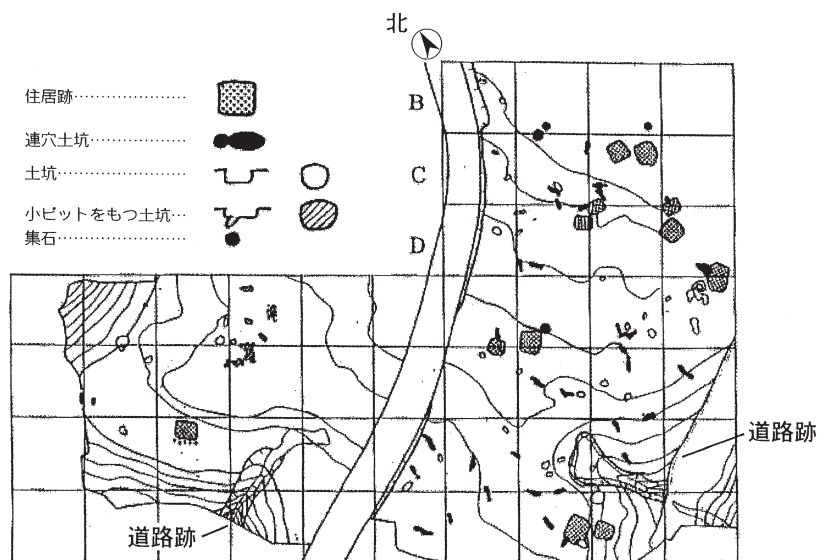
写真 1 B 地区空中写真



第2図 グリッド配置図



第3図 前原遺跡A地区遺構配置図（1マス1辺10mの正方形）



第4図 前原遺跡B地区遺構配置図（1マス1辺10mの正方形）



写真2 C地区空中写真



写真3 石剣状石器・砥石出土状況



写真4 石剣状石器と砥石



写真5 B地区西側発見の道路跡



写真6 土器出土状況



写真7 竪穴住居跡